ISSN 0389-1984

トヨタ財団レポート
THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F(〒163)
TEL.(03)344-1701～3

Jan. 1988 No. 43

研究コンクール"身近な環境をみつめよう"

『交流の集い』を開催

"身近な環境をみつめよう"をテーマとする研究コンクールも，1979年に財団設立5周年記念事業としてスタートして以来，回を重ね，現在では第5回の公募を終了し，予備研究の選考段階に入っている。

そこで，これまで8年間にわたり積重ねてきた当コンクールの意味を今一度見つめ直すことにより，財団も，コンクール参加グループのメンバーも，共に次の活動ステップの足がかりとすることを目的に，これまでの参加グループを一堂に会しての"交流の集い"を昨年11月29日(日)に東京・六本木の国際文化会館において催した。

第1部では，第1回コンクールでグランプリ（研究奨励特別賞）を受賞した岐阜県哺乳動物調査研究会と同2回でグランプリの十八鳴浜研究会および子供の遊びと街研究会・三軒茶屋ブロックの各グループより，その後の研究経過や今後の見通しなどについて報告が行われた。

第2部ではフリーディスカッションが行われ，研究コンクールの意義や，ここで期待される研究のあり方などについて選考委員や参加者から様々な意見が出された。

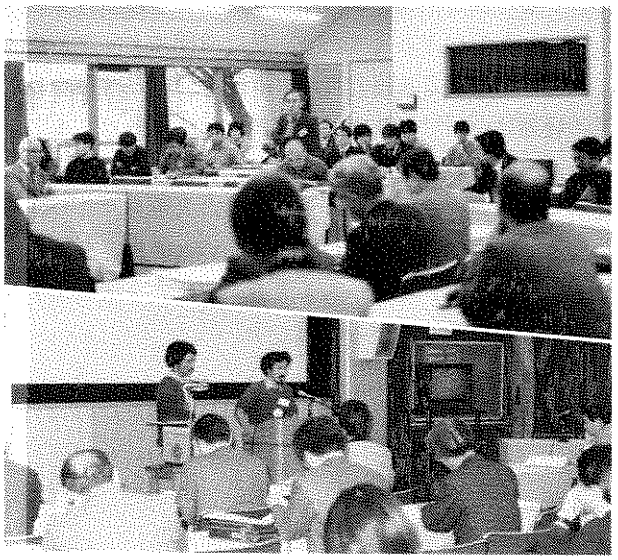
第4回研究コンクール・本研究報告会も開催

聞きごたえのあった8件の報告

前日の11月28日(土)には，同会館において第4回研究コンクールで本研究の助成対象となっている次の8つのグループより中間段階の報告が行われた。「江戸のある町上野・谷根千研究会」，「神田サウンドスケープ研究会」，「八王子市寺沢地区・酪農ヴィレッジ研究会」，「しりたいクラブ」，「行徳野鳥観察舎友の会」，「おいわぁねっか屋久島」，「アンパル野鳥研究会」，「オホーツク流氷研究会」

これらの中から，来年の春にはグランプリ等が決定されることとなっている。

▼上は交流の集い，下は本研究経過報告会の一コマ



おもな内容

◆新しい年に思う…… 2
◆"何処かで何かが始まっている"…… 3
◆国境を越えて広がる『子ども劇場』の輪…… 4
◆欧州のアイヌ関係資料の研究とその意義…… 5
◆2周年を迎えた助成財団資料センター…… 6
◆新刊紹介，他…… 7
◆最近の報告書から，レポート登録更新，他…… 8

●第5回研究コンクールに121件の応募

昨年11月15日に公募を開始した第5回研究コンクールは，去る1月15日をもって応募を締切った。その結果，北は北海道から南は沖縄県にいたる全国各地の様々な研究グループより合計121件の応募が寄せられた。

これらについては今後選考が行われ，3月中旬以降には予備研究の助成対象（約20件）が決定される。

●助成財団資料センター"会員の集い"を開催

発足後2年目を迎えた助成財団資料センターは，昨年11月20日(金)に『1987年度会員の集い』を国際文化会館にて行った。センター会員の助成財団関係者を中心に，関係官庁やマスコミ関係者等も含め，参加者は130～140名にのぼる盛況ぶりだった。(P.6参照)

●近代の日中交流をテーマに研究報告会を予定

当財団では，これまでの助成研究の中から，近代の日中交流に関わる幾つかのプロジェクトを取り上げ，『近代日中交流史の諸相』と題する研究報告会を開催する。

来たる3月12日(土)，国際文化会館（前出）にて行う予定。(P.7参照)

新しい年に思う

トヨタ財団専務理事　　浅田　孝

◈助成活動は申請者と共同の創造作業

専務理事をお引き受けして思うに，助成財団の生命は永遠であり，その目的は，常に人間社会の理想を掲げそれぞれの財団の目的とする分野について，実社会のニーズを把握しつつその基本線に則り，学術・文化の諸分野の要請に応えて公正・適切な助成を行うことにより，間接的にその財団の目指す大きな目標に少しずつ近づいて行くことに在ると言えましょう。

また，その活動に当たっては，申請者からの助成要請が何を意図し，何を目指しているかについて，申請者と助成財団との間に「阿吽の呼吸」が通い合わなくてはならず，この意味では財団の目指す処を充分に汲み取った上で，関係諸分野の専門的な立場からの評価をしていただく選考委員会の先生方のお力添えが不可欠であります。

もちろん，このような理想的な関係は，助成申請者・選考委員会・財団当局の三者の間に，三位一体となった境地を求めての厳しい姿勢がなくては保つことは出来ません。申請者にとっては何よりも先ず公平・公正に扱われている事が自覚出来，選考委員会の委員各位には良いものを選ぶことが出来たという充足感が得られ，財団担当者には財団の掲げる目標を一歩づつ実現しつつあるという自信が持てるような，そんな関係が生まれた時，委員の先生方の過酷なまでのご苦労も，財団スタッフのハードワークも，一枚の助成決定通知状が運ぶであろう喜びの中に溶け合うことが出来ると言えるでしょう。選考委員会も含め助成財団の活動は，財成申請者との共同の創造作業であるとも言えます。

しかし，助成財団の各種助成プログラムの目指す方向や枠組は，専ら理事会の委任に応えてこれを実施に移す財団責任者の洞察力や，プログラム・オフィサーの短期・中期にわたる観察や解析の如何に係わってくるものであります。それだけにまた，財団当事者には，不断の努力と研鑽によって時代の流れを読みとる力量が要請されるわけです。

◈厳しい環境下での対応と課題

これまで当財団は10年の余を経過してきました。財団の目指す永遠の生命からみれば，ほんの僅かの経過に過ぎませんが，幸いに進取の気性に富んだスタッフや選考委員の先生方のご協力，あるいは企画委員会での大所高所からの的確な示唆などを得て，大事な創生期を大過無く歩むことが出来ました。理事長を始めとする理事会から一切をお任せいただけたことで財団当事者は試行錯誤を恐れることなく，今日までの道程を駆け足で辿ることに懸命になれたと言っても良いかも知れません。

しかし，顧みるに当財団もそうであった以上に，世界情勢の推移には目を見張るものがあります。その向かうところの姿・形は未だ見えてはいませんが，少なくとも財団の助成資源の運用を取り巻く諸条件は困難を増す方向にあると言ってよいでしょう。この基調が変わらない以上，プログラムの編成や助成資源の配分をこのような時代に合ったものにするとともに，これまで以上に理事会への報告・連携を確かなものとするための努力を重ねていかなければならないと考えております。

これとの関わりでこれまでその必要は叫ばれてきたものの，何ひとつ解決されてはこなかったわが国の助成財団の活動基盤を構成する諸条件のうち，特に重要な税制の改善を政府に求めていくことや，そのための理解活動を多角的に，かつ強力にすすめていく必要があることは申すまでもありません。

◈プログラム・スタッフは財団の宝

先に私は財団の生命は永遠だと申しましたが，それならば，助成財団のプログラム・スタッフはその宝とも言うべき人的資産であります。国の内外からの期待に応えるためには，財団は常に若々しい人材を培っていく場でもなければなりません。当財団がこれまで国内・外にわたって助成を行った方々の，またこれからも期待を寄せてくださるであろう多くの方々の負託に応えるためにも，人材の養成と内部の充実とは避けて通ることは出来ません。一層の創意工夫を重ねていきたいと考えております。

新しい年を迎えるに当たり，私は財団スタッフと共にこれらの当面する課題と真剣に取組んで参る所存であり，その経過については改めてご報告致したいと考えます。また，多くのわが国助成財団の方々と力を会わせて，新しい世紀を迎えるフィランソロピーの大道を，この日本にこそ切開いていかなければならないとの思いを新たに致しております。これからも大方のご叱正を賜りますよう切にお願い申し上げる次第です。

“何処かで何かが始まっている！？”

――水面下でうごめくもう一つの社会形成への試み――

研究助成部門　　渡辺　元

◇社会変革へ向けてのボディーブロー

近年のわが国では，行政や企業といった既存の組織とは別の次元で，全く異なる活動目的や価値観を持った制度化されない“草の根”的な市民による活動が次第に浸透しつつある。こうした動きは，まだ必ずしも社会的に十分認知されてはいないが，最近では，創造性や自立性の点でかなりの実力を持ったグループが各地で活躍している。地域あるいは社会は，中央の政策によって一挙に変わるのではなく，そこに日々生活する人々の生活観をバネに，少しずつ変わっていくものであり，そのような動きがネットワークされて，やがては社会全体にわたる大きな変化となるのではないだろうか。

そこで今回は，前々号でも紹介した，「ネットワーキング・フォーラム」*に参加している一人として，これまでのレクチャーや討論，および多くの関係者との意見交換などを通してわかりかけてきたことを，私なりに整理して述べてみることにする。

◇せめぎ合う様々な活動形態

現在の市民活動の基礎となっているのは，1960年代に全国的な関心事となった公害反対運動を代表とする種々の「抵抗・告発型」とも言うべきタイプや，これにやや遅れて出てきた様々の公的対応を行政に迫った「要求型」（○○の規制，○○の建設，○○のサービス要求など）と言われるタイプである。これらの活動は，活動分野やその内容は違っても，いずれも高度経済成長による急激な工業化や都市化によって発生した，社会システムの歪みに対する“生活者”の側からの「生活基盤の防衛」意識に基づくものであった。その後，行政や企業との度々の対立や葛藤を繰り返す中で，両者（市民&行政・企業）とも次第に，相互の意向を意識し，時には可能な範囲で協力する形を採りつつあるようになってきた。これは，市民の側にとっては，いつまでも行政や企業と対立ばかりしていたのでは活動に自ずと限界が出てくること，また一方，行政や企業の側にとっても，市民の意向を無視し続けたのではもはや成り立っていくことが出来ないことなどが，相互に認識されたためと考えられる。1970年代後期の市民・行政一体となった各地での街づくりや，条例の制定・廃止等に関する「参加型」の運動の盛り上りは，以上のような背景によるものと思われる。

そして1980年代に入ると，「こうして欲しい，こうしたら良いのではないか」など，ということについての代替案を自ら構想・提示することにより，自分達で問題の解決に当たっていこうとする創造的で自立的なタイプ（「自立型」）が現れてきた。「参加型」のグループは，（地域）社会形成のあり方や構想に対する活動を行い，また，既存の生活様式に飽き足らない「自立型」のグループは，現在の生活を見直すことにより，これまでとは異なった“もう一つの生活原理”の提案を行い，かつ実践することにより，「生活の質」の追求を行っていると言えよう。

これらのグループは，活動方針（“活動は楽しく”）や資金繰りの点（“食える活動”を目指す），および行政や企業に対する考え方・アプローチのしかた（利用出来るものは何でも利用する）などの点で，かなりの柔軟性やシタタカさを持合せるようになっていることが特筆される。

◇キーワードとしてのネットワーキング

今後は，時代の趨勢とともに，こうした「自立型」のグループが若者や女性の支持を得ながら増加・発展していくのではないかと思われるが，その方向性とはどのようなものであろうか。活動分野も様々であることから，現時点でそれを予測することは極めて困難ではあるが，一般的には以下のような点が考えられるのではないだろうか。

①生活，およびそれを取り巻く環境の“質”に関するより一層の追求

すなわち，生活の基本的な部分については自分達で創出・維持し，不可能な部分についてのみ行政や企業へ依存・要求していくという傾向が強まる。

有機農産物や無公害石鹸の生産や販売活動，リサイクル運動の企業化，成熟した街づくり運動などはその先行事例として挙げられる。

②活発化する自立的な地域形成の動き

新しいむらおこし運動や下水・ゴミ処理に係わるA・T（オールタナティブ・テクノロジー）運動など，従来の工業化による方式ではなく，“もう一つのやり方”による地域形成の試みが各地で活発化する。

③活動の連携や全国的な展開がすすむ

こうした活動およびそのグループは，「物や情報で提携し，テーマ（目的や主義）で連合する」や，「グローバルに考え，ローカルに行動する」など，現在の個別的な動き（点）から，次第に分野を越えての連携（線）を進め，やがては全国的な広がり（面）を持つに至るであろう。

▽　　▽　　▽

以上，人間が人間らしく生きられるような「共生社会」を目指すこれらの活動にとっては，“ネットワーキング”が共通のキーワードとなっていくだろう。

そして，これが将来の「新しい人間社会」創出の一つの鍵となることを期待し，今後の助成プログラムを検討していきたいと思う。

（＊）問合せ先：
「ネットワーキング研究会」
代表：播磨靖夫
〒150 渋谷区神宮前4-7-12，1-D
わたぼうし文化基金内

国境を越えて広がる『子ども劇場』の輪

（財）おはなしきゃらばんセンター　渡辺祥子

❖回を追って高まる反響

国際児童年にあたった1979年，国際ワークショップ「アジアの子供劇場」（主催：トヨタ財団，共催：おはなしきゃらばんセンター）が開催された。これは，それまで殆ど紹介されたことのない東南アジア諸国の児童劇実践家達を招いて公演と会議を行うことにより，日本と東南アジアの，そして東南アジア諸国相互の，この分野での交流と発展を促すことを目指した画期的な集まりであった。特にアセアン各国の児童教育面に大きな影響を与え，以来２～３年毎に，各国の持ち回りで同大会が継続されることになった。（２回目以降の名称は「アジア子ども劇場」）第２回・フイリピン（1983年，フィリピン大学主催），第３回・マレーシア（1985年，クアラルンプル市主催），第４回・タイ（1987年，コンケン大学主催）と，回を追って熱意と反響は高まる一方であるが，何よりも，アジアの人々のひたむきさと，そして日本からの資金援助（伊藤忠記念財団，国際交流基金，トヨタ財団，日本万国博覧会記念協会，庭野平和財団，三菱銀行国際財団）なしには到底ここまで続かなかったであろう。

❖「子ども劇場」が継続しているワケ

この大会のユニークさは，「子ども劇場」を広い範囲の子供の芸術・教育活動と捉え，演劇，人形劇，舞踊，音楽，ストーリーテリング等の実践者，及びこれらにかかわる教育・福祉，図書館，出版関係者などを含む，総合的な幅広い子供文化の集まりとしたことがアセアン各国の児童教育ニーズに適したことである。次に，公演（実践）と会議（研究）の２部構成にし，現場主義にも机上論にも偏らない配慮をし，また，期間中は寝食を共にすることで人間的触れ合いの交流が可能となり参加者すべてを魅了したことである。さらに，参加者はボランティアの若者を中心に，西欧の模倣や伝統の保存ではない，伝統と現代の融合による独自の実践を試みるグループとした結果，各国における最良の人材の参加と，充実した内容を得ることができたことである。こうした点が，質の高い魅力ある大会を継続させている最大の理由と考えられる。

▼第３回大会（クアラルンプル郊外の団地にて）

❖波及する影響の数々

大会毎の独自のテーマや運営，その他具体的な内容については，一切がその都度の主催国に任せられ，その国の事情とニーズに添えるようになっている。各国を回る利点はここにあり，大会参加者は資金的に少数に限られても，地元主催地の教育関係者が多数参加できることで，どこの国でも大きな成果を納めることができた。フィリピンでは，フィリピン大学と情報センターの啓蒙活動，マレーシアでは，図書館を中心としたボランティア活動，タイでは，スラムや難民キャンプ，農村地帯などで，大学とボランティアの活動が，それぞれにこの大会の影響を大きく受けて盛り上がっている。シンガポールやインドネシアにも児童劇や人形劇のグループが生まれ育っている。

また，おはなしきゃらばんが蓄積した実践活動のノウハウと，言葉の壁を越えてアジアの子供たちに迫る対話劇（ストーリーテリング）の魅力は，参加者の共感を呼び，日本への研修希望者や，現地でのワークショップの依頼が後を断たない。それまで皆無だったアジアの地域同志の交流も急激に盛んになってきており，大会以外の合同公演やネットワークづくりも活発に進められている。これらの背景には，大会と大会の合間を利用して行ってきた，おはなしきゃらばんセンターによる，アセアン５ヶ国巡回公演，日比共同国際公演，タイ巡回公演およびワークショップ，等の国際共同プロジェクトの効果も見逃せない。

一方，日本の私たちにとって，この大会は，アジアの人々の心の豊かさとモノに頼らない人間本来の力について教えられるかけがえのない場である。また，アジアの若者の逞しさや，大人も子供も巻き込む活動の姿勢にも学ぶところが多い。

❖必要となってきた長期資金計画

今後の課題の一つは，最初からの共通テーマである「古典・伝統を現代の子供にどう与えるか」という難題への挑戦を続けることである。少なくとも，どの国も程度の差こそあれ，同じ問題を抱えているのだという連帯意識が芽ばえているだけでも大きな収穫である。また，参加者の選択については，大会が盛んになるに従い，問題も出てくる。毎回参加するグループと新たに参加を希望するグループが当然でき，常に同じ参加者によってテーマを深めるべきか，新しいグループに扉を開いて活動を広めるべきか，最終的には主催者に一任されるが，どこで線を引くかが難しい。資金の許す限り，望む人すべてが参加できるのが理想である。未だに組織も基金もなく，その自由さ故に続いてきた面もあるが，やはり長期的な資金計画無しには今後の発展が困難な段階に来ている。第５回・インドネシア（1989年），第６回シンガポールと続く予定で準備は進められている。

ヨーロッパにおけるアイヌ関係資料の研究とその意義

西独・ボン大学教授　　ヨーゼフ・クライナー

ドイツ語圏に多いアイヌ関係資料

アイヌ民族文化の研究は，ヨーロッパにおける日本文化研究（日本学）ならびに文化人類学の発展史の中で，極めて大きな位置を占めている。このことは1981年，ボン大学の主催で開かれた「中部ヨーロッパにおける日本関係コレクションについて」と題する国際シンポジウムによって改めて確認できた。

それに参加した博物館関係の担当者は，日本関係コレクションの総合目録を作るために，第1段階として，先ずアイヌ民族文化の目録を作成することに合意し，ボン大学日本文化研究所がその調査研究を依頼されて実施することとなった。

当研究所では，ドイツ連邦共和国学術振興会（DFG）より1983年から3年間にわたって研究調査費の補助を受け，私と研究協力者2名がヨーロッパ20ヶ国，（ソ連を除く）134ヶ所の博物館を対象に，アイヌ文化関係コレクションの収蔵状況についてアンケート調査を行った。

その結果として47ヶ所の民族学博物館・美術館に計6900点のアイヌ民族資料が保管されていることが判明した。その分布状況は両ドイツが圧倒的に多く，約半数の資料を保管し，さらにオーストリアやスイスでの保管数を含めると，ドイツ語圏がいかにアイヌ研究の歴史に重要な役割を果しているかが浮び上がってくる。

アイヌ・コレクションの背景

この調査研究の第2段階として各博物館を訪問し，そこに保管されているアイヌ民族資料について詳しい調査を行ない，1点毎に調査カードを作成し，各コレクターに関する資料を収集してきた。最も早いコレクションは，現在ライデン国立民族学博物館（オランダ）で保管しているブロムホフと大シーボルトの資料で，両者とも最上徳内を始め，幕府の蝦夷地踏査役人から入手したものと推定される。

明治時代に入ると，小シーボルトの打ち出したアイヌ原日本人説に刺激され，主にドイツ系の医学関係お雇い外国人が次々と北海道や樺太を訪れ，アイヌ民族の資料を収集してきた。彼等の唱えたアイヌ＝ヨーロッパ系人種説によって，ドイツ語圏で非常に強い影響力を持った歴史民族学派が，アイヌ文化の中に人類の古い形の文化を残存していると推論した。この両説は，19世紀末に中部ヨーロッパで定説となって一般市民にまで知られることとなった。各博物館は，旅行者，博覧会・展示会，骨董屋などを通じてアイヌ・コレクションの充実を計ろうとした。

独・日共同調査の開始

以上のようなことが私達の調査研究によって判明した段階でトヨタ財団からの助成金を得，北海道の白老町にあるアイヌ民族博物館の岡田路明氏をヨーロッパに招き，アイヌ民族資料についての鑑定をしていただくことが出来た。これにより，特に2つの学問的価値の高いコレクションが浮び上がって来た。

その一つは，ハンブルグの骨董屋ウムラウフを通じて明治30年代後半に北海道と樺太から収集された約700点にものぼるコレクションで，現在は約550点がヨーロッパの数ヶ所の博物管に分散して残っている。もう一つは，ウラジオストクの毛皮商人A．ダッタンが主にオスロとウィーンに寄贈した樺太のコレクションである。

さらに日本で保管されているコレクションと比較してみる時，ヨーロッパのコレクションは非常に古く，収集地や収集者の判明しているものが多く，極めて貴重な資料であることが確認された。

2回目のトヨタ財団の助成によって，東京国立博物館の佐々木利和氏をボンに招いてヨーロッパに保管されている「アイヌ絵」を鑑定してもらうことができた。その最大の成果は，フランスのベザンソンに保管されている「夷酋列像」が崎波響の直筆であることを確認できたことであるが，屏山や屏山系のアイヌ絵がヨーロッパに多いことが発見されたことも大きな成果であった。

国際アイヌ文化研究協会の設立

このような一連の研究の結論を討論できる場として，ボン大学の主催により昨年6月24日から国際シンポジウムが開催され，民族学，言語学，日本学の大学や博物館の専門家17名が参加して「ヨーロッパにおけるアイヌ文化研究の歴史と現況」について討議を行った。このシンポジウムの一つの大きな成果として，今後よりよい研究を行うための情報交換の機関として「国際アイヌ文化研究協会」が創立されたことが挙げられる。

また，このシンポジウムをきっかけに，ケルン市立民族学博物館がアイヌ特別展を開催した。同博物館は，収蔵数としては250点でさほど多くはないが，ウムラウフ・コレクションの中でも非常に良い物を保管し，またウィルヘルム・ヨースト氏の1880年のコレクションも保管しているので，アイヌ文化の各分野にわたる展示がなされることになった。この特別展では，過去のアイヌ文化のみでなく，現在のアイヌ民族が当面している問題やヨーロッパにおけるアイヌ観の変容にまで及ぶ展示が行われた。

この調査研究の最終的な段階では，ヨーロッパ人にとってアイヌ民族とは何かという問題をも取上げなければならないと思われる。

▼シコタン島のアイヌ達（スイス人・A・グーブラの資料

2周年を迎えた助成財団資料センター

——「1987年度会員の集い」と『助成財団要覧－民間助成金ガイド』の発行——

◈活発な議論が行われた"会員の集い"

助成財団資料センターが，わが国の民間助成財団界初の本格的共同事業としてスタートしたのは1985年の11月20日であった。その後順調に発展し，現在では会員数も122まで増え，季刊の広報誌『助成財団』もまもなく第8号が発行される予定である。

昨年11月20日には，東京・六本木の国際文化会館において同センターの1987年度の会員の集いが行われた。参加者は，センター会員の助成財団関係者を中心に，官庁やマスコミの関係者等も含め130～140名にのぼった。

プログラムは，林雄二郎理事長（トヨタ財団・理事）の挨拶，来賓の総理府内閣総理大臣官房管理室・橋本哲曙室長の挨拶，望月信彰副理事長（日本生命財団・専務理事）による活動報告と続き，その後「外から見た日本の財団」と題するパネルディスカッションが行われた。

パネルの司会は三谷誠一理事（三菱銀行国際財団・専務理事）が行い，パネラーとしては，コンラート・アデナウアー財団（西独）東京事務所長のマルクス・ティッセン氏，最近外国の企業を母体として設立されたチバ・ガイギー科学振興財団の塩野正春事務局長，それに，日本のいくつかの財団から助成金を受けた研究者の李廷江氏（中国）の3氏が各々の立場から発言を行った。また，フロアーの参加者を含めて活発な討論が行われたが，これまで助成財団相互の間で助成プログラムを巡って議論が交される機会が必ずしも多くなかった中で，日独の財団によるパートナーシップ・プログラムの可能性や，イデオロギーを越えて，人間が人間を対象として進めるべき助成活動の視点など，財団関係者にとっては大変実りの多い話し合いの場となった。

▼報告する望月副理事長

◈"法人化"を目指して募金活動開始

本年度は，大きな事業が2つあったが，まず一つは，"法人化"の準備であった。昨年の4月以来，理事会の下に「法人化準備委員会」を設け，関係官庁との折衝や，募金計画の策定などについての準備を着々と進めている。

先の"会員の集い"の際にも説明が行われたが，法人化の実現目標は今年の4月を予定しており，これに向けて，センターでは現在，会員の助成財団を対象とした募金活動を進めている。

今後の地球社会にとって，国内はもとより国際的にも，助成財団の役割がますます大きくなることは間違いないであろう。その時に，助成財団界の発展の一つの鍵を握るのが，助成活動を巡る質の高い情報や，それに基づく，助成する側も受ける側も含めての幅広い論議であろう。

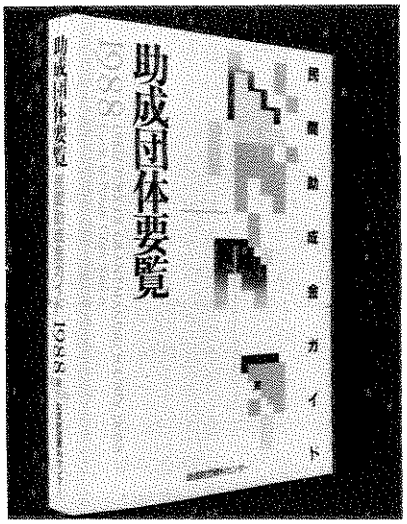
助成財団資料センターがそのための触媒として発展することを切に希望すると同時に，国内的・国際的に助成財団相互の"コミュニケーション・コーディネーター"としての役割を積極的に担っていくことを期待したい。

そのためには先ず，会員各財団の協力の下，"法人化"を早急に実現させ，少しでも早く安定した自由な活動を行うための基盤整備を行うことが必要であろう。

◈売行き好調な『助成財団要覧』

本年度事業でのもう一つの大きなことは，『助成財団要覧－民間助成金ガイド－1988』（B5判，438頁，定価3,500円）を多くの財団等の協力により完成することが出来たことである。

この要覧には，助成財団等が約200，公益信託が約200それぞれ収録されており，編集方針も，助成を希望する人々がガイドブックとして使えることに主な重点が置かれている。幸い，本書は第一法規出版（株）から発売されることとなったため，普及する範囲もこれまで以上に広がり，またマスコミなどで評価されたことも手伝って，発行以来順調に部数を伸ばしている。同書の問合せ等については，下記までご連絡を。　（渡辺記）



『助成財団要覧』に関する連絡先：

【問い合せについては】
助成財団資料センター
〒160 新宿区新宿2-1-14
エレメンツ新宿ビル3F
☎：03－350－1857

【購入申込みについては】
第一法規出版（株）
〒107 港区南青山2-11-17
☎：03－404－2251

第24回研究報告会のご案内

近代日中交流史の諸相

◇日　時：1988年3月12日（土）
13：10～18：00
◇場　所：国際文化会館・講堂
（東京都港区六本木5-11-16）

【セッション1】
座長：ダグラス・R．レイノルズ
（ジョージア州立大学）
◆明治期日本の対中接近の理念と行動
――財界と大陸浪人――
李　廷江（中国社会科学院）
◆戦前日本の対中国文化交流事業
――アメリカの場合との比較――
阿部　洋（国立教育研究所）

【セッション2】
座長：市川健二郎（東京水産大学）
◆華橋教育の沿革と現状
――日本の場合――
市川信愛（宮崎大学・教育学部）
小沼　新（　〃　）
◆華橋教育の沿革と現状
――華南・台湾の場合――
劉　暁民（廈門大学・南洋研究所）
林　顕宗（台湾・政治大学）

▽　▽　▽

◎出席ご希望の方へ……
住所・氏名・所属（勤務先）を明記のうえ，3月7日までに研究報告会係宛てお葉書にてお申し込みください。
なお，定員に限りがありますので，申し込み多数の場合はお断りする場合もあります。あらかじめご了承ください。

新刊紹介

『おいしい水は宝もの』
―大野の水を考える会の活動記録―
大野の水を考える会・著
築地書館・刊
B6判　並製，254頁，1,500円

本書は，当財団の活動記録助成により，日本でも極めて珍しい地下水にまつわる住民運動「大野の水を考える会」の活動の歴史を，その活動の中心的役割を果してきた事務局長・野田佳江の手記と，その会員たちの声をもとにまとめたものである。

地下水に関わる公害問題や環境問題は，古い歴史をもっているにもかかわらず，地下水の水位低下や地盤沈下など，ここまで広域的な地下水問題を運動としてとりあげたグループはこれまでほとんど例がない。福井県大野市に在住する一人の主婦のもった素朴な疑問に端を発する，同地域の地下水位の広範囲にわたる低下の判明をきっかけとして，やがて，それが住民の節水運動につながり，さらに，市全体の水環境や水経済の問題にまで活動の視野が広がってきている。

昨今の“都会派的活動”の陰に隠れて忘れかけられていた，オーソドックスな活動の代表的な事例として，また地域や住民の心をダメにする“男のエゴやメンツ”に対する警鐘として，多くの関係者に一読をすすめる。

『続　岐阜　ふるさとと動物たち』
岐阜県哺乳動物調査研究会・編著
岐阜日々新聞社・刊
B5判　並製，382頁，2,000円

編著者である岐阜県哺乳動物調査研究会は，1983年3月に，第1回研究コンクールで研究奨励特別賞を受賞し，その後も継続して県内の哺乳動物と人間との係わりについて，古老への聞き取り調査などを進めている。本書は，受賞時の作品でもある『岐阜　ふるさとと動物たち』の続編として出版されたもので，岐阜日々新聞に連載された159項目の動物伝承を中心に構成されている。写真や図版も豊富で，素人にも大変分り易く親しみ易い。巻末には主要なデータや資料目録も収録され，索引も行き届いている。自然と動物と人間の関係について多くのヒントを与えてくれる一書である。

『日本の農村空間―変貌する日本農村の地域構造―』
山本正三・北村吉弘・田林　明・共著
古今書院・刊
A5判　上製箱入，423頁，5,800円

沖縄を除く日本全土の農村空間を，地理学の立場から14の類型に区分し，各地方毎にこれらの類型を概説（以上，「第Ⅰ部　農村空間の諸類型」），さらに典型的な類型地域について事例調査を行い，変化の実態を明らかにしようとしたもの（以上，「第Ⅱ部　農村の諸相」）である。10年余にわたる調査の総集編であるが，この調査の開始期1976年度に，トヨタ財団は「日本における都市化の地図分析」のテーマで研究助成を行った（以降は文部省科研費による）。高度成長による日本農村の変貌を，マクロとミクロの両面から総合的に捉えた力作である。

『韓国における国語・国史教育―朝鮮王朝期・日本統治期・解放後―』
森田芳夫・著
原書房・刊
A5判　上製箱入，552頁，10,000円

近・現代における日本と韓国との関係，あるいは韓国の歴史についての研究には多くの困難が伴うが，近年，実証的な研究を進めようとする気運が日・韓両国で急速に高まってきている。本書は，朝鮮王朝期から現代に至るまでの国語・国史教育の文献や資料を渉猟し，その変遷と発達を跡づけたものである。前半部は，「総説」となっており，朝鮮王朝期（江華条約以前，および開化期），日本統治期，第2次世界大戦終了後に分けて概説している。後半部が「資料」で，各時代の参考文献の抜粋（翻訳を含む），文献

原文の復刻，教科書，表記（漢字とハングル）が収録されている。著者は，在韓国日本大使館勤務後，10年近くを韓国で本書の研究や執筆に従事したが，その時期の2年間，当財団から助成が行われた。現代の韓国社会を理解するうえでも貴重な文献と言えよう。

『中小企業の女性たち―経営参画者と管理者の事例研究』
国際女性学会・中小企業の女性を研究する分科会・編
未来社・刊
A 5判，並製，404頁，4,500円

本書の基礎となった研究は，昭和55・56年度の助成（代表：原ひろ子）により実施された。研究グループは，都内に事業所を持つ中小企業の女性経営者・管理者などを対象に，インテンシブな面接調査を行なった。その結果にもとづき，中小企業の女性の社長，役員，管理者66人のライフヒストリーと，それを基にした様々な角度からの分析・考察とをまとめたもの。

『子育ての町・伏見―酒蔵と地蔵盆』
伏見のまちづくりをかんがえる研究会・子供の生活空間研究グループ・著
都市文化社・刊
B 6判，並製，278頁，1,700円

伏見の住民有志からなる「まちづくりをかんがえる研究会」が，当財団の第3回研究コンクールで「京都伏見における酒づくりと子育ての手づくりのよさの研究」を実施した。この研究は残念ながら本研究までは進めなかったが，これをきっかけに京都大学の「子どもの生活空間研究グループ」と共同してその後も着々と調査を積重ねてきた。本書は，この間の調査や活動の成果をとりまとめたもので，多くの住民の証言や豊富な地図，イラストなどを通して伏見の移り変わりをいきいきと描きだしている。

『水車の技術史』
出水　力・著
思文閣出版・刊
四六判，上製，426頁，2,600円

近代の技術の発達に関する実証的研究が，わが国でも少しずつ実り始めている。本書もその貴重な実りの一つと言って良いであろう。著者の出水氏は，昭和55年度から3年にわたり，当財団の研究助成を受けて大阪府下の水車業の跡を訪ね，実測し，文献資料を集め，関係者に聞き取り調査を行った。そして，昭和30年代まで存続した水車業の実態を明らかにしていった。

本書は，この大阪をフィールドとした実証研究の成果を中核に，水車の技術史的な背景や日本各地で今なお稼動している水車の状況を紹介し，水車のもつ将来の可能性にまで言及している。日本の水車の全体像を知るための好著である。

最近の報告書から

当財団の助成研究から，「成果発表助成」によって印刷された報告書を紹介します。入手ご希望の方は，送料分の切手を同封の上，財団レポート係宛てお申込み下さい。（品切れの際はご容赦の程を）

C-016 愛知の産業遺跡・遺物に関する調査報告　（愛知の産業遺跡・遺物調査保存研究会　代表・石田正治，B 5　346頁，和文，送料 300円）

愛知県下の工業高校の教職にある人たちを中心とするグループが，県内に現存する近代の産業遺跡・遺物を克明に調べ，その評価や保存について検討したもので，第3回研究コンクール受賞研究の成果をまとめたものである。調査結果の概要が，第Ⅰ編としてまとめられ，第Ⅱ編には，589件の産業遺跡・遺物リストが，第Ⅲ編にはそれらを保有する237の博物館リストが収録されている。近代産業の発達史を物語る遺跡や遺物に対する関心は日本の各地で高まっているが，全県下を対象にこれほど徹底した調査が行われたのは始めてのことではないだろうか。

登録更新手続きのお願い

事務局では現在，『財団レポート』の読者に関する登録の整理を行っております。誠に恐縮ではございますが，継続して登録を希望される方は，同封のハガキにて2月末日までに更新の手続きをとっていただきますようお願いいたします。

なお，更新手続きのなかった方につきましては，登録の希望無しと判断し，以後のレポート送付は取り止めとさせていただきますのでご了承願います。

また，新たに登録を希望される方は，住所（〒を明記），氏名，所属（勤務先）をご記入の上，お申込みを。

編集後記

◆遅ればせながら，新年おめでとうございます。今年の干支はタツ。それも戊辰（つちのえ・たつ）。中国の古事によればこの年は「革運」（機運一変）とやらに当たるという。

◆当財団でも，昨年専務理事が交代し，新専務理事による運営は今年から本格化することになる。諸般の情勢厳しき折柄，困難を克服し，見事“昇龍”となりますかどうか？　本年もよろしくご指導の程お願い申し上げます。

◆クライナーさん，渡辺さん，ご寄稿ありがとうございました。また，クライナーさん，昨年秋の国際交流基金・国際交流奨励賞の受賞おめでとうございました。

トヨタ財団レポート　No.43
このレポートを継続してご希望の方は，お葉書にて財団宛てお申し込みください。
発行日　1988年1月25日
発行所　財団法人　トヨタ財団
発行人　山口日出夫
編集人　渡辺　元
印　刷　真友工芸株式会社